

## 東京都立大島高校農林科 椿園の紹介

伊豆大島では元町で一万年前のヤブツバキの化石が発見されており、古くからツバキが自生していたと考えられています。高温多湿の気候と酸性土壌を好むツバキの性質は、伊豆大島の風土に適しており、潮風にも強く丈夫なことから防風林、薪炭材として利用され、大島の「文化」として島民の生活に密着してきました。産業としてもツバキの炭は火持ちも良く良質であり、江戸時代では伊豆大島の重要な生産品であったとされ、ツバキの種子から得ることのできるツバキ油は現在でも特産品として知られています。そしてツバキの咲かせる多彩多様な花々は人々の心を魅了してやみません。

農林科では、昭和52年より大島公園からツバキの園芸品種を順次導入し、挿し木や接ぎ木で増殖させてきました。現在では約380種類の原種、園芸品種のツバキが校内に植えられています。毎年2月に開催される椿まつりに合わせ大島高校椿園も一般公開しています。この時期に伊豆大島にお越しの際は、ぜひ大島高校に足をお運びください。

2018年度 当ホームページ制作担当者より

私は三年の農林科生徒です・私は課題研究のテーマを椿園にしています。椿園を整備し、椿をもっときれいに見せたい。椿をたくさんの人に知ってほしいと思い、この活動をしています。

ここでは私が撮影した椿や椿園の様子などを紹介していこうと思います。

### 出典・参考文献

大島高校農林科「生徒による椿ガイド」台本

台本原稿は平成25年以降に歴代農林科生徒が以下の文献および民話・伝承などをもとに作成しています。

横山三郎 桐野秋豊『新装版 日本の椿花』淡交社 2005年

日本ツバキ協会『最新 日本ツバキ図鑑』誠文堂新光社 2010年

塚本周作『椿に魅せられて - 生木の椿・文芸の椿・うましうるわし大和』リーチアート 2010年

有岡利幸『ものと人間の文化史 168 椿』法政大学出版局 2014年

など

## 宝合 (平成 30 年 1 月 30 日撮影)



この椿は宝合（たからあわせ）という椿です。この椿は「宝珠咲き」という咲き方をする椿です。宝珠とは、球形で先がとがった形をした玉という意味です。開ききると右のようになります。（本校には宝合が隣り合わせで二本ありますがもう一本の宝合は模様のピンクが濃い目です。）花の形に変化が多く、平安時代から伝わる日本の遊び、貝合わせにちなんで宝合という名がつけました。

## 王昭君 (平成 30 年 3 月 17 日撮影)



この椿は王昭君（おうしょうくん）という椿です。王昭君とは古代中国四大美女（楊貴妃、西施、貂蟬、王昭君）のうちで悲劇の美女として伝わっています。王昭君の生きた時代の皇帝は画家の描いた肖像画をもとに後宮の女性を選んでいました。後宮の女性たちは何としても美しく描いてもらい皇帝の目にとまりたいと願います。そこで彼女たちは画家に賄賂を渡すのですが王昭君は決して賄賂を渡すことがありませんでした。

賄賂を渡さなかった王昭君は画家に醜く描かれてしまいました。匈奴（中央ユーラシアに存在した遊牧民）の王が宮廷にやってきたとき、皇帝はこの絵をもとにして王昭君を選び匈奴の王に与えました。ところが会ってみると大変な美女、皇帝は後悔したそうです。

この椿は王昭君のように美しいという理由でこの名前がつけました。八重咲きよりもさらに花弁が多い千重咲きで植木の産地である兵庫県の宝塚で作出された椿です。

## 想いの儘 (平成 30 年 3 月 17 日撮影)



この椿は想いの儘（おもいのまま）という椿です。想いの儘、多様に咲き分けることからこの名が付いていますが、本校のものはそれほど咲き分けません。咲き分けると白地に紅の縦紋が入った椿や紅の単色の椿など多彩に咲き分けます。八重咲きで尾張地方（今でいう愛知県）で古くから栽培されている品種です。

## 講武侘助 (平成 30 年 1 月 30 日撮影)



この椿は講武侘助（こうぶわびすけ）という椿です。島根の野生ツバキから選抜された椿です。講武というのは地名です。黒っぽい花は田舎らしい静かで落ち着いた美しさがあります。「侘助」と名前がついていますが、厳密に言うと実際は侘芯椿です。（侘助椿は外国産ツバキの系統、侘芯椿は日本のヤブツバキの系統のもの）とても小さくかわいらしい落ち着いた雰囲気の花が咲きます。